

傷双の田代

特43

17



W216031

千代田 刃傷 一十四

色香珍しき女の顔を洗泊の備々目守て居たりしがエ、モウ我慢の緒が切たど抱き寄たる其  
 の後は嵐が散す雪吹風戸を打音のみ聞けりこ、よまた川上理順が家の妻は元柳橋の藝妓  
 よて小時と稱し者なるが理順と怪しき赤繩を結び流れの末の神田川に足を洗つて水道の  
 邸に入込たる者ゆへ理順の寵愛一方ならず漢武帝か楚の襄王か孰れ比翼の禽となし連理の  
 枝となる鐘も曇る巫山の雨催ひ漆膠の交情なりしも如何なる事か女房の妻振の怪しき  
 のみならず白江が繁繁入込むは例の負債の催促と思ふには似ぬ舉動あるも理順が胸は燃る  
 が如く彌々夫と見極て打擲それをも如何な動せず前前の貧苦も愛想が盡す男の悪くと  
 も白江さんの身上に惚込だから前さん所態の爲に成る人を後直して未短かく暮す心よ  
 れ成なさい御同朋でも派向の宜白江さんの襟元に就た妾が憎いなら打も敲きもするがい  
 が夫をするには二百兩の金から先へ算段れしなど輪に吹烟の長烟管良夫の面へ突付て久し  
 い間御世話に成たドレれ歸りとしませうかど手荷物携へ立出し深き心はしら江洗伯妻よ別  
 れて閨淋しさを圖らず理順が女房と怪しき縁を結びしが根が水性の唄女上り取廻しさへ並  
 々ならぬも固より多淫の洗泊は復なき者と思ひ居る折しもれ時が断来りて今川上が是々の  
 舉動ありしを幸ひに通れ來ると告げるも洗伯大いさ歡びて渠若し和女を迎へ來らば負債  
 を督促て懲す程に一生此處に居るが宜ど其儘止め置たるが白江は一旦川上の妻のれ時を奪  
 たるより心次第も驕り來て今は誰にも憚らず遂に吉原角町の半藏松葉の全盛たる装太夫  
 を根引なし元のれ園に稱良たれどれ園は心なき人よ身受されたる歎しさも層て加へて兄松  
 藏が思ひ設けぬ園の身となりしてふ事を聞苦界に増る苦しみる病氣と言出洗泊よは未だ

一夜も打解ねどね時は夫とも夢知ねば装太夫が来る日より若や寵愛傾きて我は秋野の  
捨扇見かへられぬは知た事と思へば嫉妬の氣起て修羅を燃すを洗泊は在らずもがなと思ふよ  
り邪見な扱ひのみをして果はれ時を退出せしは文政五年菊月の中の五日の事にして本年は  
神田の年番にて祭も一層賑やか綺麗を飾し郡衆の中をわたり時は一人纏々と身の越方を案じ  
詫元の良夫の悪心と愛憎が盡て歎面した報いは觀觀今の身とならぬ廣葉に置かぬ因果は  
宿世の業ありてか二世と憑みし元夫が畏れ多くも御城内にて博奕をしたる負債を督促れ勿  
體なくも上様の御佩刀を盗まれしは慥か夫と見たる後去年山王祭神の夜怪しい姿で歸  
られたは是も悪事を仕損じて遁延たとは後又知る世の取汰沙吹上の御寶藏へと忍みし  
全く圓原であつたとの話を聞て彌々怖く心染ぬ彼人よ身を任せても今日の時宜思ひなき  
世に在んより寧ろ死たが増であらうと獨言つゝ明神の森の立樹に細帯を打懸今や縊れんと  
するを端なく救ひたる女中の連は何人なるか次に至りて自から明瞭なる事あるなるべし

第七回

秋尾花結梗の色も遅りつ、王と結べる白露の上も鳴く音も細り行く昔しは是も臥猪の床よ  
起臥茂き傾城の装太夫と時めきし盛りは今も變らぬ身より懸る秋風や野分は早き庭の  
面に引据られて緋縛の繩の端取り心なき下僕が繋ぐ若松の梢はよしや折るとも常磐の色  
深翠變ぬ節が身を責る苛責の答今日はまた照る日まばゆき椽先に相も變らぬ洗泊が柵のま  
ゝに聲荒らげ廓を根引して以還はや半年に近けれと病氣事擬洗泊は只一度も歡びの顔を  
見せぬ片意地から其身にかゝる繩目の艱難然までも己を嫌ふなら己も飽まで辛くもる人の

依固地を知ぬといふ汝よてもあるまいが去とは曉ぬコレは國能マア物を積つて見ろ堅氣  
青の處女なら操を守つて仇し男よ肌を觸ぬと云事あれと且吳客を門外に送り夕は越人を  
圍門に迎ふる勤の身に誰が爲し意地を立るか節を守るかアレ見よ尾花は露の妻寐るも起  
るも偈俱に仇し心のなきものも人よ手折れ花瓶の水に其身を任すなり難面も亦事よころ寄  
れ再び苦痛をせぬうちに色好き返事を聞せよと責れどね國はさし俯向洗泊さんの心切を替  
にはさらしく思はねと義理と誠の二道を立るが苦界の意氣地にて猪も添寐の糸裁も仇よ  
は心の花を遷さず富貴の襟よ就やうな心を持ぬ此の園を憎しと思し給ふなら元の苦界よ沈  
めてたべと道よ洗泊氣を焦燥またしても片意地な一旦身受をしたからは再び苦界よ沈めう  
ぞ是非よ心よ隨はずば斯して遣ると立上りしが思ひ返して取出す琴をね園が前差付け所  
詮一筋二筋では我に靡くと言はせま三三三の調糸音の調子も琴柱にあり今其の琴柱よ  
膠せば争で呂律の調はん汝の節の誠あらば柱を据置て其の儘よあはれ美事に弾きて見よ曲  
に異なる處なれば望みの通りに暇を遣ん若し少しでも柱を動かさば汝の節は動きしものぞ  
疾々彈せよいで聴んと椽側近く腰打懸け目守詰るよ胸騒ぐれ園は今更否みてハ彌々苛責よ  
苦まん夫は厭はぬ事なれと弾ねば節のなきよ似るとは言琴柱よ膠して呂律合べきものなら  
ず無理難題と知りながら弾じと言とも免さるべきやと思ひ屈して爪を取り心よ神の應護を  
願ひて糸かき鳴す折しもあれ手先と思しき三三個走り懸つて白江を捕へ天下の法度を心得  
ながら畏れ多くも城中にて賭博をなしたる白江洗泊御用なるぞ神妙よせよと叫り叫り組ん  
どとるよ白江は遙に飛退て思ひ散けぬ嫌疑かな這は正しく人違ひと言せも果すヤア扱すな

刀の盜賊川上理順と其妻お時が口書にて慥な証據のあるものを陳ずるとも脱んや手向致  
 とな御用をど罵も敢ぬはや折重なり高小手に捕縛たるは積悪邪慾の報にて寔に忍ろ  
 しき天罰なりけり「然も亦川上理順は博奕の負債を拂ふ苦みて御側近く忍入り御差副を  
 盗みしのみか猶も文政四年六月十四日の夜吹上の御寶藏へ忍入り寶器夥多を盗みしかど  
 圖らず入支へられ辛く其身を免れしが反て罪は支たる人に罹りて是が爲我が身は安穩な  
 るべしと歡びたる間もあら川や岸の妻石瀬を離れ彼處の淵身身を寄し妻のれ時が死を決し  
 て思はず明せし良夫の悪事を竊か聞たる屋光寺八重子松平花乃の二個は救はれ良夫の爲  
 一箇の辛き目を見る松藏が冤を雪ん其の爲に松平家よりれ時が言を據証となして訴しか  
 ば直地に理順は捕縛にかゝる悪意を起したる基は如何と尋ねられ包もならぬ帝鑑の間の御  
 床下にて賭博せし發黨人は白江にて其の外甲乙十人なりと事明白招了したるにスハ白江  
 を召捕て拷問せよとの嚴命は白江を始め連累を舞と捕へて拷問ありしが証據分明なれば一  
 同は恐れ入ぬと罪は落たる處より先は嫌疑晴れずして幽囚の客と成よける若黨松藏は赦免  
 れて我家に歸る歡びよ就ても思ふ主の恩花乃八重子が助けのなくば何迎無辜を免るべき今  
 は暇の身なれども参りて禮を返さばやと思へば些しも猶豫せず囚夜さへ脱かへぬ其の儘  
 牛込築地町なる外記が邸に赴きたれば花乃も外記も無事を喜び其の夜の始末を尋ねらる、  
 一松藏向をか包むべき席を正しく道けるやう去る頃下僕要介の首級を以て安西を威したる  
 後營中よても御前に對して無禮をする者なき由は知たれど私かに渠等が容子を見るよ一歩  
 の懸想はさて置て安西伊賀は八重子様は熱心なる事益々深く折がなむば奪ひ取んと夫は連

なる神尾安西沼間戸田などの若殿原が諒吉様の御邸を覗ふといふ事を聞込み若然成ては  
 大事と日夜彼方の御邸を徘徊なして守護するうち六月十四日は山王の宵宮より方りて彼處も  
 此處もいと賑はしき今日こは大事の時と思ひしゆ朝より麻布三河臺の御邸へ行き立  
 廻れど八重子様は其前夜御里へ御出が在たよしよて御出のなきは幸ひと思へど若や途中  
 よて變事なきとも圖り難しと心付いては雲時も堪らず取て返して半藏御門を這入折から怪  
 しき者の女と挑み争ふ容子に這奴曲者と引止る其間女中は伴人を連て難なく行過られた  
 が跡にて此身は憶なく彼曲者と過たれ捕縛の恥辱を受たりと語れば花乃は膝を進ませ聞バ  
 其方は姉君を守護する爲に夫程まで苦勞をした上禍災は罹つたとは知なんだ其夜半藏御門  
 にて怪しき者を支へしは姉君なるよし後にて聞きしが若し其方が今一足早かつたなら姉君  
 一御目通も出来たらうし冤の細目の受なんだらうよと言を外記は打消て種々物語をする事  
 一あれは兎も角衣服を改めて浴み月代して來れ花乃衣服を渡せよと兄が詞は老實て取出す紋  
 一服羽織袴大小までも主人より厚き恵みの賜物と松藏大きに喜びて疾くも部屋に立歸り髪月  
 一代に浴もなし以前の衣服は改めて静々外記が前に出るを側へ聘寄せさて松藏其方は先年余  
 一よりして暇を遣たる心意を推し妹装が身係り裁許を仰たるよしは慥に承知致したが其  
 一の後妹は如何致した存ぞ居るなら語りて見よと思ひ設けぬ主人が門に松藏ハット頭を低  
 一げ公儀の御裁許願ひし折妹は圍は禮奉公を致して義理を立る所存と拙者も頼みの仔細も有  
 一れば其の意に任せて居るが身の年期証文を此方へ取り夫よて公事を下たれば未だに松葉屋  
 一半藏が抱むと成て居ませうと答へに外記は莞爾と笑み否とよ夫が間違なり本年妹の装は

白江洗泊し身受され彼方の家の妻となりしが病に事托身を任せぬを彼の洗泊は川上の妻の  
 お時が居る故と思ひ誤り其の女を放逐たる上態々口説き何かな靡かぬより洗泊大さよ之  
 を怒り孱弱女を縛縛て苛責の筈に苦しむ折から先其の家を逐れたる時が爲り積悪報い  
 其身は捕縛られしと聞より花乃が駈付てれ園を助け連歸り介抱なして兩親の小間使となし  
 居ば此の儀も安堵致しべし夫にれ園を勾引せし武兵衛といふは刀の盜賊川上理順が事にし  
 て渠お園をば憂臥し沈めし金にて水道端の川上といふ表坊主の株を買て化逐せ此の年月を  
 送りしかど竟し此回身の料の脱れ難きを察してか逐一招丁したりといふ咄を慥か聞込た  
 り此の事未だれ園は語り聞ねば父君に見参したる其後にてれ園も物語未だ傳ふべき  
 事あれど今日は生憎夕御番故最早登城の刻限なれば明日まれ言と我居間さして入たりけり  
 松藏の重なる主人が慈愛よて吾身のみかは妹まで危難を救ひ取れたる此高恩は酬いんは  
 開も何を以て竭すべきか古語にも小人の忠を盡は則ち其の力を盡し大人の忠を盡すは則ち  
 其の心を盡すと言ける如く心もて酬ゆる事の難くとも我が畢生の力を竭して須彌滄海にも  
 彌増る恩義は酬いはやと思ひて益々忠義を勵みしとぞ是は此れ後の事にて故ら此處に擧た  
 難くて竟し遠島の刑となり其の家残らず斷絶せしとぞ是は此れ後の事にて故ら此處に擧た  
 るなり爾說松平外記の父頼母は取年並一日も早く八重子を呼迎へ夫婦交情よく暮そのを  
 老の望みと思ひ居たるは圖らずれ園の装を我家へ引取り養ふの頼母は偶然心付き借は  
 子息も豫てより北の廊を通ひ詰め斯る女と二世三世契りし故に八重子を嫌ひ幾度いへども  
 婚姻を拒むは此の所以ならん遷莫世良田の遠縁よて家系正しき松平の家は傾城傾國を入る

も快々らぬ夫を本妻と直さざる子息の心情は隨はんや親と親とが承知の上結納までも取  
 交し殊に去る文政元年一旦實家を後よして良家へ來る途中の難儀は元の家へは歸りもせず  
 我が親族に身を寄て敢て婦道は戻る事なき八重子が前は申せよ及ばず座光寺殿に對しても  
 面目なき此の始末兎にも角も松藏に事の心を得させ上萬事を渠に任しなば妹を諫め外  
 記を慰め何とか趣向を付るであらうと思ひ付ては老の一轍雲時も猶豫なら坂や兒手柏の二  
 正執れを憎しと思はぬと義理には曲て御愛の絆を外に松藏へ斯と告れば畏まり下拙の口か  
 ら申上げても御信用は有ますまいが御前に於て然る姪弄な事のないのは下拙めが慥に存宏  
 て居まするが承まはれば佞人原の御前を窺ふ事休て聊か穩かなる由なれば此間に伉儷の御  
 祝言遊ばさるやう下拙めが不及ながら周旋を致しまするで御在ませうと夫より直し三河  
 臺なる松平諒吉が邸へ行き八重子に目通を請しかば餘人にあらぬ松藏ゆゑ此方へ通せと  
 いふ詞は女中は誘と先立ち案内をなして優室の化粧室へと伴ひ行ば八重子はれ時に髪を  
 捲せ鏡に向つて居るを見るに髪かけさへも松平の家の紋をば崩したる唐艸様の葵艸見る松  
 藏は心を察し頼母が所存に我所存を俱に打明婚姻の事を頼りに促とに八重子は首を傾けて  
 よしや佞人安西門が殿は優くすればとて妾の上は執念も鬻縁居るに疑ひなしと言をれ時が  
 モシ嬢様夫に就ては斯々と密かに私語言の葉を聞く松藏は雀躍して出來たくと勇み立ち  
 暇を告る間疾遅し飛が如く走り歸りぬ文政五年十月廿二日月代遠き亥刻過赤城の社の彼方  
 より窺ひ出たる一個の侍士儘此處と點頭て歩行向ふと駈來る仲間御前様かと言聲を高く  
 と止めて低聲に先の容子は如何であつたと問れて此方は然候ふ只今牛込御門より遠見を致

千代田 刃傷 九十四

と右往左往に通て行く  
跡は曲者四邊を見廻し  
駕籠の引戸を開きつゝ  
手を取出す嫁御察八重  
子ならんと思ひの外思  
ひ設けぬ理順が妻是はどばかり打驚く袖を捕へ安西様未だ御了簡は直りませんかと言れて  
伊賀は其手を拂ひ不入諫言聞耳持ぬ誘来い下部と安西は鶴町とへ歸り行く「お時が事此下  
も物語なし」爾る程に松平外記は八重子と借老の契を結び父にも母にも安途させしが登城  
の度に安西本多沼間戸田間部神尾們が宿意を挟みて意地悪く公務の妨げのみ爲て外記を辱  
むる事前に勝ち進退ともに困難なれど猶能く之を堪忍び只其の命を仰ぎては公務を扱ひ居



八十四

せば多くの人数箱提灯を振照して此方へ来るを能く見るに九曜の星に隠岐葵正しく八重子  
の駕籠と覺しき物をも認たれば直様取返して候ふアレ／＼向ふにさそ火影御由斷あるな  
御前様。オ、大儀で有た認忍べど互ひに彼方へ身を隠し今や遅しと待受たり坐光寺玄蕃が  
娘八重子は今ぞ黄道吉日の来る大歸の行粧も晴の駕籠伴廻り徐々どねり行く赤城下誰とは  
知ず屏所より顯れ出たる曲者が物をも云す研て入る餘りの事に驚きて夫怪我とるな扱たぞ



たりしが一日日本多伊織(一學改名)より吩咐られたる書物を雑務に紛れて忘れ居たるが疾く果されは再びまた如何なる難題も及ばんと思ひ出しては猶豫もならず遠き書類の函を開けば中には書類のあらずして「さ、がにのいとし果なし木枯よ思ひな懸るあらぬ垣ねに」と記せし一葉の短冊なり外記は此の心を知ねば這は怎麼いかよと驚きて右さま左さま考へつ諸は本多伊織を始め安西自餘の人々が我を御十の外に逐目算ありていと敢果なき誠と思ひを懸なせろ汝の身は復ふべき垣ねなしとの事なるか餘りといへば無禮の段今と成ては免し難しと思ひ定めて下城の、ちは妻にも取へて詞を懸す一間のうち閉籠りて孤燈の光に端坐なると主の意中を露知ぬ神は主人の傍へ行き膝の上にとらんとするを透さず側なる小刀の振打し神の細首打落し血も拭はず打眺むる此方の隔ては父頼母彼方に立し衛立の後よ窺ふ松藏の居るとも知らず嘆息し乍ら焼刃を目護我明日は八重子を伴ひ築地の邸へ引移る所存なりしが夫も亦今は書餅となりけり世の俚諺にいふ如く犬畜生を吠たる刀は切味殊に妙なりとか其の畜生に劣つたる安西本多自餘の者を切て憂ひを除かんよは此の刀ころ相應けれんろ武士の嗜みは最期を清くするにあり我れ奸人們を心の儘に砍殺したる後は其場な去す割腹せん然らば父も今生の暇乞を爲すべきか氣丈なれども来年の上明々地に期と告なば船に階して傷を求むる千悔なしとも言難し思ひ言より只他所ながら暇乞を乞ふるころ却て宜かんめれ然は言後にて問給は無や嗟又臥給はん八重子は懐妊の者なるよ爲に體を損ねなん花乃は日頃我を慕ひて萬談合敵となすよ定めて便なかるべし夫も是も宿世の因なり豈今世に果なからんや嗚呼我ながら愚痴なりきと涙を拂ひ小刀の血押拭ひて鞘に

歛め神の屍體を片付んと只見れば後に窺ふ人あり一個は遙く逃入たれど一個は體を懸し兼て隣隣影を透しみれば思がけなき父頼母遺は父上にて在せしか何故此處へは來せしやと問間頼母は座を占て外記先近うと呼近け父は知じと思はんか毎日御傍に勤むる身五年以來種々の妨げなして安西們が汝を苦しむる其基は八重子を所望したれども既に汝の妻と定り遂に其意を得ざりしかば伊賀介は其恨を汝に酬いん心ならん又本多一學(今は伊織)は花乃を所望したれども口約せし者なりとて斷り遣し其の折は花乃は猶も此後の思ひを斷せん其の爲よさ、がの歌を記し遣しが却て彼は忿ほりて益々汝を恨むなるべし然ども彼の汝を恨むは畜夫のみよ非ずして武藝學業衆も勝れ古參の者も時として汝よ劣る業多ければ三ひ已を省みず能を妬む少人の癖之を飲り之を倒して后の憂ひを除かんころ身を殺して仁となと則ち武士の譽かかし營中兩山に血を注ぐは好しからぬ事なれども是亦時と勢ひとの止を得ざる事あるなり寛永九年十二月豊島郡部井上計主頭が又傷より今を距る四十年天明四年六月廿六日新御番なる佐野善左衛門が田沼山城守を切たるまで前後八度の刃傷ありしが皆私しの宿意と雖も國の爲よ好を細き後を清めん爲にして可憐命を犠儀に供ふる者に非るはなし仍て汝に與ふるは是なる小刀なりと遽興に外記は膝を進まし父が恩賜の寶刀を押頂きて席より復り我が愚なる心から父君知し給はとと思ひ惱みて候ひしに子を視る事親に及ぶ能く我が心中を御洞察ありたる上は何をか包まん先年駒場野御成の節我新參の身を以て頭酒井山城守より拍子木役を仰付けられ身の面目と其擧を下り筆頭安西伊賀介よ式の指南を受んとするに渠は先より戸田彦之進か沼間右京に命ぜられたしと願ひ置たる事あるに突然

拙者へ下命に依り益々恨ま堪かねて指南をせんとして拙者の額を打割たれども其儘役目は無  
事に濟せしかと夫よりして本多們も或は何或は何と種々奸計を廻らせしは幾十度ども定な  
らず今日登城の其節も本多伊織が拙者に向ひ道は大切の御用なる不急ぎ認め候へど御用  
箱を渡せしか其折他用に取紛れて難て件御用箱を開けば只今承はりし妹が送りし短冊  
なり夫と見るより神尾戸田間部沼間們は手を拍て拙者を嘲弄すのみか重役まで聞か上ん  
ど騒ぎ立を漸くに和説て其場は薄しかと歌の心判じ惑ひて退身せんとは思ひしか情々思  
へば在昔より難を避て身を脱れ餘命し全うする者あれど道は只一身の苟安を偷みて義を重  
んぜざる者の所爲なり我苟くも武臣は生れ何ぞ斗筭の輩に倣はん四海鎮守の柳營を潰し百  
世一系の家姓を殺し快々らぬ事ながら今彼の奸者を劔却せずば早晚宿弊を除くを得ん親に  
先つ不孝の罪を免し給ひて後進の番士が勤仕の便の爲に我が一命を棄んころ拙者が本意に  
候ふなれ只第此期の心懸りは八重子が腹の孕子にくろ親の顔だに知されば定めて父を懸し  
と謂ん祖父の君が御心にて宜く御育給はるべし次に花乃は幼きより同姓松平諒吉と口約  
けせし者なれども若我が死しなば老體の久しく家政を執給ふ事適ねば妹には拙者が豫々其  
の器動と志望とを見抜置たる小日向水道町の長谷川左膳が次男彦次郎を妾子となし花乃と  
婚せ給はりなば血筋の絶る憂ひもなく死しても最早遺憾なし情願御許容下されたと涙  
ちかみて述にける頼母は老の涙脆くオ、天晴なり其の一言老脆ひても松平頼母子息が義勇  
を顯はして後の憂ひを除かんとふに何とて家を惜むべき然れども汝が頼みの一識承引さ  
れバ應れや出ん委細に承知致したり併しながら今容易彼們を殺すは其の期に非ず暫時期の

第八回

到るを待よ心得たるかと水入らず父子互みの閑談も冬の夜更も静々と鳴る鐘の音も凍りたり

紹前套再説松平外記は憶なくも我が宿意を父の洞察ありし上家に傳はる長船の小刀を賞  
ひ受け其の翌る朝は非番なれば豫て移轉の積なりし築地小田原町二丁目の邸に移りて此方  
へは八重子の介抱をささる爲に園松藏の其の外に心利たる侍女と仲間兩人を雇入れ最睦ま  
しく活計居れば誰とて憊る望ある身とは一切知る者なけれど松藏のみは之を知り折がなわ  
らば其の意を開き我慰けをせんものと思へど外記は夢聊か斯る器動の見ぬ上猶正首も勤  
仕それば却て松藏は其の心意の反覆あるかと疑ひしが時しも文政第六年未の四月廿日の晝  
外記は一間に垂籠て物の本を見てありしを何心なく奥方八重子は新茶を煎て持來り左様  
讀書を遊ばして定めて程退屈したドレ茶など啜ませうと言つ、八重子を顧りて言新らし  
を欠伸に交らし何やら餘程屈したドレ茶など啜ませうと言つ、八重子を顧りて言新らし  
くいふには非ねど女は總て行狀の容易からぬ者にして操の堅き者ならでは眞の婦人と言難  
し凡そ武士の妻となりては其の準備が肝要にて良夫も如何なる變ありとも哀慟に沈みて事  
を誤り世の胡慮となる事なく能く其心氣を落付て時よ從ふ措置をなし内外を守り脩めざれ  
ば眞の烈女と誰か言ん別て卿も言置は懷孕たる婦は故らよ慟きよ軀を傷けず其の身を愛し  
て恙なく分娩さん日を候給へ己に嬰兒の生れたらんよは愛育薰陶忌りなく膝下の教へ果た  
らば師を撰みて之を教へ其の子は從ひ終るべし這は今云ふべき事ならぬと思ひ出し、告  
るぞかし誓な忘れ給ひろと夫とは言ぬ遺言と後にぞ思ひ合さる、其の言の葉の外は漏て先



の程より覗ひたるに園松藏の兩人が我にもあらでよと泣聲な立と松藏が制しと陰を  
 營出裡は心つくまなる錫を重ぬる習慣の有とし聞と争肯は恁る卑しき事をなさん御心惱  
 し給ふなど何心なく言八重子の答へよいとど不便さの増るを我から願して外記は重ねて八  
 重子に向ひ否卿は然る事なけれと這は婦人の道はころ疾くより教訓を受たる卿の賢き心  
 は知てあれば言はずとも知事なるが語敵のなきまよ由なき事をも言出たり併しながら武門  
 の某若し明日も事ありて身を果さんとも言難ければ夫等の時の心付に一言卿にいふ事  
 あり腹なる兒の顔だに見す不幸は命を陷す事のありたる時は父君は請て花乃は世を譲り腹  
 の兒をば順養子となして家名を祠せよかしたまた内外の事柄は松藏ころ力ならめ渠は數回  
 恩を被せ充分忠義を盡すべき義理に纏括て在る事なれば能く老實て仕ゆべしと言つ、涙を  
 押包むに八重子は不審晴やらす甲歎乙歎と思ひ詫び良夫の前に膝摺寄せ身に餘りたる御教  
 訓心に徹して幾久しく守りまするで御在ませうが心得難きは今日限りて斯る御教訓事の  
 序と申しながら徐々御話し遊ばしても宜しき事を不祥にも死出の旅路の首途か何ぞの様に  
 仰やりまるとるは深い御思慮の有ましてか二世の縁の女房は語り給はぬ御心がね恨しいと  
 不樂し氣に問れて外記は頭を掉り否所存はあるに非ねと武士といふ身にあれば今宵如何  
 なる事あつて命を果るか量らねば疾より言んと思ひしかと便がなくて今まで延たりと々な  
 らぬ和女の事ゆゑ所存のあらば打明して商置歎きよせんものを何條隔て包藏べきと道とも  
 八重子は猶肯ず最憚りある事に侍れと君が御心を猜するに妾が上と妹御の御身よりして宿  
 慮を包む安西本多が邪智佐好古參を精どりなしも故と君をば蔑視て公務を歎せ或はまた

所天は痛く恥辱を與へ執念賣縁千狀萬態に障碍のみを爲ととし聞ば武士の本分刀の手前集  
 們を執して夫子も亦其の場を去す腹掻切り死を潔くする御心は侍らすやはと自から思ひ出  
 して當歎否歎若し然る向の事よあれば妾も立番が娘に侍り夫子が夫人に侍るから未練な歎  
 きを致しませうか八重よ恁々云云にて予の討死するぞかし跡の難儀は松藏と謀りて万事執  
 討へよ孕の兒には會ねとも男兒にもあれ女まれ養ひ育て我跡を續せよかしと仰やつて下さ  
 るならば及ばずとも其心して居るべきは隔給ふも事よころ依れ喃我が夫と組合せし諸手外  
 して其儘は夫子の膝を揺動せは外記は屢々嗟嘆して語り出んとする折から其の答は拙者  
 めが致しませうと入來るは別人ならぬ松藏なり後又續いて装のね園も俱に座し就ば駭く外  
 記よ一禮して松藏徐は首を擡げ心志相同して伉儷納る寔は奥様の賢慮明察男子もをさく  
 及ばぬ所至く殿の御心慮は歎を先よ立まぞとて只他所ながらの御遺言圖らず御庭でね園と  
 共よ承まはつて驚き入り是が今生のお別なれば充分別を惜ませ給へね園も驚と御禮を述  
 御暇乞を申さずやとされてお園は思はずも聲を放つてよと泣なく蟬よりも聲立ぬ澤の笠  
 の身を焦と八重子は適れ烈女なり胸は八千裂百千裂五臟を絞る悲みも涙一滴目に持す猶細  
 々と後々の事を謀りて良夫には必ず仕損じ給ふなど勵し添る義裂清賢儔罕なる女丈夫なり  
 けり既外記の心を決し妻も遺言なしたれと今は思ひ置ことなし只此上の氏神なる築土  
 八幡大神へ參詣なして武運を祈らん衣服を出せと言棄て外記の勝手へ立て行き身うちを洗  
 ひ清め八重子が取出と衣服大小手早く纏ふ平熨斗目献上博多の帯引締め麻の上下の麗々し  
 びに大小二口横腰よさすがは滴れ義勇の武士立關先よ立出れば若黨下僕は疾よりも草履直

して待て居り立の聲と俱侶も外記は静かに歩み出れば鞍置馬を引出すに鞭取添へてゆらりと乗り牛込投て急ぎけり案下再説松平頼母の外記が決心見るからに家も傳はる長松の小さ刀を與へしかば今日は美事と安西門を斬て武名を轟かそ若し仕損て未練なる化さまなさは家の瑕瑾何卒天晴豪傑と褒賞さる、様にせよと心の裡も八幡の加護を祈るの外どなき父が憂慮を夫どとは知ぬ二葉は良夫の鬱性若し永引ば何とせん外記の遠くに離れて存ば萬事に就て心細し自分は公務に暇なれば八重子なりとも迎へんかと心を碎く折から若一別以來の挨拶をなし父上様は御番にや將御在邸遊ばさる、かと聞は二葉は御居間よと言つ、外記を打見やり這は心得ぬ結果かな今日は四月の廿日にて御儀式とてもなき筈成に麻上下に熨斗目の紋服何事なるぞと咎められハツとと思へど素知ぬ顔不今日は志願ありて八幡宮へ參詣なし其の歸るさ御坐りますると言紛らして一間へ入ば父の頼母は夫と見て早く心を猜しけん自ら衣服を改めつ二葉も亦禰袴を纏はせ書院へ出で土器を取出さしつ銚子よは水を盛てぞ備へける事の次第はまだ知ぬと二葉は夫と見るよりも我もあらでせり來る泪覆すを頼母の見咎め外記の幸先祝ん爲の水盃に不吉の涙卿も武士の妻ならずや未練者めと叱られていと、歎しき二葉より泣じと眼をしば叩く頼母が心汲別る外記は彌増歎しさを胸に歎むる四苦八苦親子三人が音よ立ぬ心の歎きよ姑らくは詞もなく寂寥たり登時頼母は姿を正し二葉よ泣な歎くまじ能く其心を落付て此の祝盃の酌をせよ我から飲で外記に與へん誘疾々と促がしつはや取上る土器を見れば益々胸騒がれ一回銚子に手を添れ

と雖か知すか氣が進まずまた取下してよ、と泣悲歎の涕も禰袴の袖の染地も流れやすらん生者必滅會者定離の道は悟れど今更に二人となき男子を死に出すと思ひては涙も濁る聲を低め頼母は土器下に置二葉卿は何も彼も容子を知らず歎くのか但しは未だ知ざるかと問れて二葉は涙を拂ひ知いで何と致しませう現在息子が死出三途の首途を祝ふ水献盃疾より夫と知ながら徒氣な外記が心に恥何よも言ず居ました妾も其方の母ぢやもの何の未練に止やうぞ天晴美事に打透せ義勇の譽れを懸かせよとは言もの、御番士も撰み出された計て未だうら若き男郎花秋をも待て散果る夫計りかは腹の兒の顔さへ見ず死にやつたなら後で其子が世間を見て何故私よは爹様がない事やらと自から肩身の狭い事であらう在て甲斐なき老の身は生憎後よ存命て盛の我子を殺すとは如何なる前世の因念か叱らせ給ふな我夫と座にも得堪ず泣轉々外記も頼母も骨肉の是が一世の別れぞと思へば胸に突懸る涕吞込呑みて詞口籠む六の袖絞る計りの氣を取直し外記は二葉に打對向母上己に知給は、多辯は要なき事にこそ何卒親に先達て歎きを懸る不幸の罪免させ給へと言つ、も父上夫なる御玉露をど請へば頼母も涙を拂ひ嗚呼我ながら不吉の涙二葉も泣じいさ酌せよと冷水を飲で遞與を押拜き獻酬九酌及びしかば外記は再び父に向ひ明日は勤めて佛參なし先祖の墓へも託を申さん何卒佛間の參拜を許させ給へと請申すよ何の遠慮のあるべきや誘侶俱にと先よ立父に引添靈牌に拈華燒香姑くは看經なして父母に盡ぬ別れを惜みつ、暇乞ひして立歸りぬ其の夜も嘆も眠られねば過來方を思ひ遺枕を浸らす夫女禽明日は片羽を斃さる、駕齋ならなくも侶俱も絶も入なん心地して俱も其夜も泣明せしが廿一日は晝御番にて老若登

城の其の前に出頭をべき等なれを聊か思ふ由あれば病氣と披露し代番を立て香華院に詣で  
などして其日も空しく暮しつる夕刻よりして妹花乃が頼母の用として訪来り一個の包を差  
出し、を披いて見れば割符見なり赤銅魚子の金象眼にて葵の御紋を散したるは則ち先づ賞  
ひたる備前長船の小刀に具足したる者なりけり外記は一層父の恩を感ずるに付け何卒し  
て首尾よく仇を討遂せんと勇氣は漸次加はりて花乃も亦意衷を明し同じ涙も新しき歎  
きに果しなかりけり

第九回

兩御番に三種あり請取御番畫御番夕御番の三組にて請取御番の早朝出仕前番よりして御番  
を受取り畫御番は老若の登城前に出頭しまた夕御番は申刻に登城なして宿直たり總て一番  
六人なるが四月廿二日の朝は本多伊織、戸田彦之進、間部源十郎、池田吉十郎、安西伊賀介、  
松平外記が請取御番に相當して各々明六に登城する此日を婆娑の別れ時前夜よりして寐ら  
れぬまゝ、外記は五更の頃に起身内を清めて一念に神明佛陀の加護に依り武運を助け給ひて  
よと祈る折しも侍女が御膳の仕度整ひたれば誘と計り進るを誰ぞと見ればお園なり應と  
答へて座に直り探る著さへも今生の名残と思へば何となく氣の進まぬを取り直と椀に浮め  
る勝男武士かつとし聞ば喜ばしく懸て進む酒盞も涙を見せし八重子が節義勵されてか花  
乃まで心音に泣く死別れ献酬式の畢りし外記は納戸へ垂籠て一人着換る繼上下衣服も死  
して臭さを止めん爲か伽羅の香の薰止めて立出る玄關先には松藏が兩手を突て待て居り  
八重子花乃も見送りの是が顔の見終かと思へば得了勇氣の八重子も今は保難し涙と、も

さし出す刀の手前泣たさを泣ぬ良夫に取纏り言んとしては言も出ず顔を仰瞻て潜然と泣音  
は同妹も兄上適れ御手柄をと言も畢らず臥轉びツツと計りに泣出せば不便の者と見返る  
外記の袴の裾を引ながら六時にも最早間もなきに何とて猶豫し給ふそと勵ます若徒松藏の  
詞は外記は涙を拂ひ皆々然ばと立上るを雲時とばかり右左り袖の袂に取纏れば拂ひも敢ず  
また纏るを心弱くて適じと外記は詞を荒ら氣て未練な八重子花乃まで同じ様と恥をか、そ  
か未止ると縁を切るそよ夫でも泣か。サア夫は。縁を切ら加袖を離とカエ、奇怪な其處  
放せと力任せに振拂ひ松藏來れと足早に千代田の城へ急ぎける歩めば疾き下馬先にまぶ  
登城する人なきか明離れたる旭時此に來か、る松平の後引添ふ松藏が御前雲時と呼留め  
未一個も登城なきにや静り切たる此下馬先れ話し申す仔細といふは今日安西伊賀介は病氣  
に依て代番を立てまた曲淵大學は畫御番を斷りて已に二人の敵を失ひ目ざとは本多間部沼  
田神尾戸田の五人なるが沼間と神尾は夕御番ゆる休息を待討取給ふか夫とも時節を待る、  
かと言出す誠を打消て此後及及び宥餘をなさんや猶松藏は言事ありとて後の事など遺言  
しつ涙を拂ひ別れ行く心の裏や如何ならん凡ろ人の重んずべきは生命と名譽なり事に臨ん  
で生を欲せず義を見て死するは其の名譽を後の世まで輝かさん武士の本懐なるべきか然ど  
も生命を遺惜して功名とも全き者なり只賣名と戀々して死後恥辱を受るもあんめり寔  
に弓矢とる武士は其の行ひも難きかも閑話休題單表松平外記は今日を限りの命ぞと水  
臥盃まで酌交し生て復び歸らばな肯年頃重なる宿意を傲し奸を鋤き末の愁へを除か  
やはと思ふ心を色目に見せず相番より先に出仕し其の日も無事勤めしが申刻より夕御番



の早出登城したりしかば事務と詰所を引渡して請取番は二階なる休息所へと下りたる外  
 記は未だ手を下さず偏へし折を見てありしが斯ともいさやしら真弓ひく手の糸を断れたる  
 恨を合む本多伊織外記を警と打見やりて松平生御貴殿の按摩を久しく願はぬが氣は若くッ  
 ても老の癩終日書役を勤めると肩が張て何も堪らぬ未だ御用の残餘もあれば鳥渡一様願は  
 れまいかと背向になれば松平は委細承知仕つれと御紋服の上より揉ば上に對して恐あり御  
 召替をど勧むるに伊織は數々肯肯て寔に外記殿の言る通り然らば着替申さんと小紋の松  
 に脱替て外記に肩揉ませつ、うとく、睡眠む容子を見て間部源十郎後より小縷捻つて鬚に  
 掲げ戸田と表を合しては打興じて居たりしが懸て按摩も終りしかば外記は陸尺を近く招き  
 用意の重誥を取寄さず此折戸田は奥へ行き本多間部池田の外に長野勝次郎川村清次郎、  
 堀長左衛門、伊丹甚四郎、横山重三郎、北尾友之進、の六人居合せ外記が取り寄たりし物を見  
 るに父頼母が拜顔と覺しく内朱外黒の八寸重よて三葉葵の金御紋いとも得難き器と盛しは  
 踏菓子などの比類なり何の風情はなけれども宅より爲持し此重誥何卒に開き下されたと  
 いふ折から沼間右京神尾五郎三郎も夕番にて登城なす此處へ來り是は、松平生彼の  
 れ美しい眞様が精神を込てのれ重の内頂戴するも身の果報と異口同音に言側から間部は蓋  
 を取除き成程美事な御重誥方々如何と言ながら其處等見廻し箸なれば沼間は外記を打見  
 やり貴殿は先年番入の節馬糞の行厨は尿の茶漬を食つた事があるが未だ獸の性か失ぬか  
 箸を採すに手摺で食事をなさるか夫ともまた我々どもを嘲弄せん爲め態と斯様な物を持出  
 し見せびらかす氣か外記殿と針持つ詞に赫と焦立今は用謝成難しいで一討よと思ひしかと

猶も怒を静めつ、箸を添ぬは心付なし只今陸尺に取寄すべければ暫時是でもれ用ひる有た  
 しと小刀の斧兒を扱て其場は差出せば間部源十郎の手に取て成程美事な此の斧兒作は眠に  
 頼谷宗知是も父御の拜領物か夫は然と松平生聞ば當月駒場野へ小鳥御成が有るに付六年前  
 手遅な相圖をしたる御貴殿が本年も矢張拍子木番末席よりして大切な役儀を仰付けられ  
 るのも頼母殿が御側丈け親の威勢で子の出世併し這番は失錯ぬ様下稽古でも爲されたと  
 言べ外記は首を下げ仰の如く先達て組頭大久保殿(六郎左衛門)より命ぜられし旨を對し安  
 西曲淵の御兩所は指南を受んと鼠山にて稽古の折に願ひしが何かれ心障つたのか却て拙  
 者に教へて呉と申中にてお勘入なく遂に稽古も空しく成り其後兩家のれ邸へ伺ひたれど御  
 不在にて其効なきのみか追々日並も迫るより本多殿に伺つて拙者の宅へ寄合を開きたれど  
 も御兩所のれ出なき故不得止今日御辭退申してござる。夫は近頃お氣の毒とは言もの、分  
 限を越て差出た事をすれば随分夫な狼狽は當然の事でござるナと言傍らより一同が詞を添  
 へての嘲弄過言聞ぬふりにて松平に御教示厚く承申そいさお開き下されたと進めに任せ  
 て神尾五郎三郎然らば項戴仕つらんが割符兒の一箇のみでは人員に相應仕つらぬと言へ  
 ば間部が手早くも外記の差副ぬき取て只今箸を進ずべしと重箱の蓋取より逸く片端より打  
 割つ之を削つて箸となそより堪へし松平も今は忍ぶも忍びかね葵の御紋の附たるもの  
 を刃を以て打割るとは取も直さず調伏同様最前といひ只今といひ餘りに無禮の致され方拙  
 者を嘲弄せらるゝは如何程爲さるも宜しけれと上へ對して無禮でござらうと謹み候へど  
 言せも果す五郎三郎調伏とは何の謔言貴殿が出せし此重誥取るべき箸の非るゆゑ貴殿の刀

で割た蓋よしや御紋を切たりとても拙者御咎めあるべきや貴殿が刀で切割れば則ち貴殿が  
調伏なり若輩の身を三省す古老と對して推參千萬調伏など、ハ片腹致し口を籍んで控め  
されど以前の弁兒中より折外記が面へ打付て突と座を立し袂を叩へ無禮過言も程ころわれ  
外記は西城守の番士貴殿に打れて黙すべきやと言をも聞ず打笑ひ歐れて立腹めされるか  
然らば是では何と召るゝと咳を面へ吐かけて袂を拂ひ起て行く已れ神尾五郎三郎逃るとは  
卑怯なり歸れとばかり立上るを何した者ぞ松平此は營中靜かよめされと止る右京の面を見  
詰外記は恨の涙を流し右京のお聞下され拙者は固より新參よて不肖の者ゆゑ勸向不束な  
るかは知ねども各位方が六年以還朝よ晩にの嘲弄罵詈甚だしきは勸向を妨げ給ふ事もわれ  
と此は兩御番の習慣よて我如何やうに陳るとも一朝一夕に改まる事にあらねば時節を俟ん  
が神君よりして拜領せし此の長船を小刀よ添て父に賜りたる御紋散しの筈兒を折る計りか  
は是も亦當將軍より拜領の御重を割し振舞は亂心ならずば調伏なり斯まで恥辱を受ながら  
何此儘に濟すべき神尾を捉へて存心を聞たる上の所存あり放ち候へ沼間氏と氣を焦つなる  
松平を其儘其處に引据て松平氏またしても野暮な言のみ仰しやるが方に出はせぬ窓の月先  
の出様一つでござる夫に貴殿は何ぞと道と父が父がと語る、が然までも後親父が大切なら  
何故退職して朝夕の世話となさらぬ松平生夫よ何ぞや先輩の古老よ向つて嘲弄々間敷今の  
一言聞苦し扣召されと嗜める此時までも御張を認め敢て一語を發せざりし本多伊織は瞞  
と見やり沼間氏貴殿も大人氣ない腰拔武士にお構ひあるなど言せも果す松平外記ヤア言し  
て置ば不禮過言腰拔武士とは誰が事を思ひ知やと言も了らず小刀を抜くより早く右の肩

先斬下るに驚く人々止めもやらす殿中なるる亂心せしかと呼はるうちに本多伊織は返す刀  
の腕の牙筆をも捨す死でけりスハヤと驚く沼間右京が小鬘をかけて一刀同玄枕よ臥轉ふ番  
所よりして歸りくる神尾五郎三郎は性來の臆病者とて斯々見るより屏風を取て小楯よした  
れど太刀風劇しき外記が刃先あしらい兼て逃んとする尻を抉れて階子より轉び落たる其か  
儘よ與庭さして逃て行く外記は已よ二人を刺留一人よ微傷負せしかど目ざと敵の間部源十  
郎が見ぬぬ怒り猶加りて止むる戸田の手を拂ひ二回三回砍付て番所間近よ斬込ば與よて  
居睡り爲し居たる間部の勃くと起直り誰かと思へば松平外記血刀携て何とする何とする  
は知た事公務よ預る身を以て新參者を嘲弄し奸佞日々増長なと汝が輩を征伐して後の憂  
ひを除かん義心ヤア奇怪なる其一言汝如きよ討れんやと事未だ中央ならざるよ白刃迅くも  
閃めきて眉間を深く砍付られ嗟咄と止むる右の手よ再び深疵を負しかばアツト叫んで仰反  
たる生死は定かならねども既よ恨を晴したれば猶も吉十郎を伐んと外記は血刃提げ二階よ  
り下かける姿を見るより逃惑ひたる池田吉十郎は白衣の儘にて戦ふ勇なく逸足出して其場  
を逃退き寅の間塚の杉戸を確と締切り開させねば外記も今更敵を失ひ出んとすれど出もな  
らぬ袋の鼠轍の鮒若し此の儘に捕へられ憂恥さらすは本意ならずいで潔よく生害せんと  
押肌脱て段階子の第二段目よ腰打懸け刀逆手に取直せしが我にもあらずハラと熱き涙  
を翻しつ、彼方を白眼で突立上り目的敵の本多沼田神尾間部戸田の五人は恨の刃にかけた  
れどもろが首領たる安西伊賀介、曲淵大學の二人を無事に許し置ころ重ねく遺憾なれ  
と言既よ營中を騒がしたれば再びまた渠們を斃さん手段なし只此外記が一命を犠犠よさし

効ありて后世營中の風儀を改め新古の差別を論ずる事なく私情の爲に公務を曲ねば外記か  
 横死は何ぞ惜まん皇天后土隣み給へど云も畢らす伏し家尊も慈母も恙なく千年の壽を  
 保ち給へ八重子花乃も身を傷らす孝行怠ると勿れ只不便なは松藏れ園主とも兄とも頼みた  
 る外記も別れて便なからん猶亡も後も忠義を勵み子孫の繁昌頼むぞやと再び三び伏拜みア  
 、我ながら愚痴なりき勇士は死期ころ肝要なれど左の脇へ突立て中央廻せど刀動かす腕さ  
 らし自在ならねばは何事ぞと氣を勵まし右手をさし伸腹臍を掴み出んと焦燥も是さへ  
 自由利ぬより太息を吻て見廻せば母が手づから縫與へし守袋の細紐が腕に縋線萬羅付き  
 捉んどそれを離れねば今は只得楷梯を下り上り框の土間へ飛下り刃を立て咽喉に宛行二度  
 まて深く貫きつ刀を抜て廊下へ登り合掌なして死したるは天晴愛たき義勇の武士借や行年  
 三十三歳まだ部屋住の身を以て國家を思ひ後進を憐れみ泰平無事の昇代に我から刃の霜と  
 なる其名は千代田の松平翠は後にぞ深かりける借も池田吉十郎は外記が自殺の始末をば  
 精く見届頭たる酒井山城守と知さんと思へど白衣の儘なれば同僚井上政之助の上下大小を  
 借受て近藤小膳と諸とも蘇鉄の御間の彼方なる頭の詰所へ注進せしかば山城守は組頭大  
 久保太郎右衛門を隨へて直ち其場へ出張し創痍者を暇と撰分を此時己も日も暮て燈を  
 頻りに集めなごし切れし者を改むるよ一人神尾五郎三郎のみ絶て行方の知ざるに山城守は  
 氣を焦燥するうちにて一人でも逃たる者の有んよは役義の落度御目付に聞えぬうち疾探  
 せど番士陸尺の嫌ひなく御庭の諸所を索めさしぬ

第十

主人の安危如何ぞと忠義一圖の松藏は案々詫つ、下馬先へ來りて動靜を伺ふよ夫ぞと思し  
 き風説もなく申刻下りよなりけるが時求めて立歸る鴉が頻り哀れ氣を啼き騒ぐより松藏  
 は折も折とて鳥啼き若し仕損じて阿容くど敵の爲に生擒に御成なされは遊ばさぬか武藝  
 に於ては手練とて人も恐る、御前ゆゑ左様の事のあまるいが何をいふよも敵手の多勢此方  
 は纒かよ單身なれば萬一恥辱を受給ひて恨を重ぬる事はあらずや心懸りな事ではあると行  
 つ戻りつ立騒ぐ折しも番所へ人の駈來て若しや神尾五郎三郎も下城をなしは爲ざる乎と尋  
 める詞を聞答め左様な人は見受ねども夫故夫と辱ねらるゝやと問返されて然ばとよ未だ御  
 目附へも進達なければ表向ては語られぬが御書院番松平外記が宿直よ依て本多伊織沼間  
 左京戸田彦之進間部源十郎神尾五郎三郎の五人を切て自殺したるが中よ神尾の行方知す頭  
 も大きよ心痛して疾く探せよとの嚴命なり夫故此方を尋ねしと云も了らする歸るを洩聞居  
 たる松藏は始めて胸を撫下し猶も精しく問んと思へど番所の事ゆゑ夫を成す靴を隔て痒  
 を搔く心地せらるゝ折しもわれ以前の男出來りて御安心あれ五郎三郎は尻を切れて二階を  
 落ち白衣無月の儘にして御番所へ行き抜捨たる白衣を以て蘇鉄の間の御床下へ匿れ居たる  
 を表陸尺源太郎と見顯され引出だされ只今手當眞最中また松平外記殿は山城守殿六郎右衛  
 門殿立會の上内見視の有たる處腹搔切り咽喉を二ヶ所貫ぬきて兩掌を合せ斃れたるよし美  
 事な武士の最期やと人々稱へ居り候ふと告て其儘立歸るを暇と聽たる松平が愀への中よも  
 雀躍して築地をさして駈去ぬ思ひは同じ奥方八重子妹花乃の顔見合せ兄を案ずる想ひ音の  
 涙に濡る袖袂れ園も傍よ慰さめ豫て人に言れぬ胸の憂泣腫したる兩の目を覆へど洩る其處

へ息急歸る松藏が両手を上げて物をも言ず動と其場へ座を占るよれ園は水を與へなとして介抱されば八重子は摺寄り松藏容子の如何ぞや察しに違はず佞人等を皆殺にして潔よく御生害を遊ばしたらうのと問に花乃も詞を添へ日頃健氣な兄上様無勇まじき働らきをなされた事の有うがなと互送と問懸るれ園も背を撫ながら兄さん定めて御城の内の動靜を聞なされたらうと早く話して奥様や花乃様へ喜びを仰やらぬかと右左り三個の女に問かけられ若黨松藏太息吻き奥様もれ儲様も無れ嬉しうござりませうれ園も喜べ御前様は恨み重なる人個を切て縛縛の恥辱も受ず物の美事御生害遊ばしたとの下馬の取沙汰猶能く容子を探らんと氣を揉焦燥と營中の椿事なりとて警固厳しく少しも後は分らぬとも己本望遂給ひて御切腹を遊ばしたは喉かに番士の物語に聞ました故其の儘に取返して御在ますと語るを聞き奥八重子は思はず彼方に一禮して我が夫能く佞人等を討て其場を去敢ず健氣な最期を遂給ひし夫にて所天の武士も立ち佞人ども、此後は新參者を凌辱せま所天のれ捨遊ばしたる御一命ころ末世まで兩御番士を安逸と勤仕せしむる賜なれ女ながらも此八重子未練と歎きは致しませぬと只歎きは夫程まで忠義と厚き御身をば後の爲とは言ながら武士の意氣地に棄給ひ絆の心と知らぬ族のアル見よ外記は一朝の怒に心錯亂騒ぎて場所柄をさへ憚らず名もなき刀傷なしたりと笑んとの歎はしよ若し佞人の公務さへ妨げざれば存命て事ある日よは御馬前まで美事に討死なされんものを惜やとばかり言さして聲息らせば花乃もまた涙押へて喃嫂上奴々は英雄しく在ませば兄上様が健氣なる今の話を勇しと思召さんが此の花乃は幼稚時よりれ惠受け稽古事さへ習ひたる親と均しき兄上に別て泣すに居られ

せうか未練者よと蔑視れ笑はれるかは知らねとも妾が男であるならば代つて切死せんものを夫も適はぬ身の因果と身を振りしてぞ歎きけるお園は身も代もあらぬ思ひ今更返らぬ事ながら先年廓へれ出の時勤の意氣地を立貫て神尾とやらを恥しめたる恨は却て大恩ある御前の御身に懼つたか妾のみかは兄さんまで重なる御恩を受ながら非常の時の際役にも立に立れぬ下賤の身勿體ないが廓まで始めて御目よ懸つてより良夫と頼むは彼君と思ひ焦慮し甲斐あつて復び御目には懸れとも思ひ設けぬ兄さんに會ば戀しき其人は御主人様であつた故所詮通ぬ我が戀と思ひ絶ても絶やらぬ胸に焚く火の身を焦し今日まで存命居たものを未御恩さへ碌々よ送らで永きれ別れとは神も佛もない世かと歎けば得了男氣の八重子も今は堪難て保ち保ちし非歎の涙包むよ餘る流涕の顔を反向てよと泣松藏さへも岩を以て碎かる、より最苦しき胸を撫つて控へ居る四人の涙八の袖ちぎる、悲きぞ道理なる却而説西城にては番頭酒井山城守を始め組頭大久保六郎右衛門門急ぎ使を駈せさして當番御目附新庄鹿之助が詰所よ至りて道けるやう只今酒井山城守組西丸御書院番の番衆の内急病人の候へば即刻御醫師頼れしとヤすを逐一聞届けて當番竹内莫仙と詰番數原玄忠を急ぎ西丸へ遣されぬ是より先同役たる安西伊賀介、曲淵大學、万年彌一郎、松平九郎右衛門其他相番一同に惣登城を命せられ子の刻過よ罹出たりまた竹内、數原は西丸城よ起きて其病人を何とかに見るよ松平外記亂心よ依り相當神尾五郎三郎、本多伊織、間部源十郎、沼間右京、戸田彦之進に手傷を負せ自殺したる譯にて醫師も一時は驚きたるが手負を逐一診察して藥を與へ手當をなし創痕よ深淺の候へども事切たるには之なしとて其儘御目附よ書面を上げしに當番新



庄鹿之助は加泊安部四郎五郎と評議をなして聞か如きは死者も外記只一個なれば矢張常体の病人にて下宿の方が穩便ならん若表立てるときは御規定もあり面倒なれば此議如何と兩人より山城守へ言けれども酒井は首を打掉て開は穩便候へども事を包むは宜からず六かしくども後日の爲曲て御檢視下されたと彼是問答あるうちに夏の夜なれば短くてはや黎明になりけり今は拒むも是非なしとて御目附兩人も其場立會鶴と實檢したる上鹿之助より本丸へ外科醫を迎へたりけるは廿三日の辰刻外科川島周庵と天野良雲を差向られ猶も曾谷伯安を宅より呼上げ手當をなし再び創痕者を診斷して御目附新庄鹿之助へ左の如く申し立ぬ

百會の下連より三寸程深さ一寸四分程疵一ヶ所右の手首堅四寸深二三分程之疵一ヶ所同所大指の脇二寸程殺疵一ヶ所

神尾五郎三郎

醫こぶた横三寸程深五六分程之疵一所

戸田彦之進

肩の襟へ懸長さ一尺二三寸程深さ二寸程の疵一ヶ所醫こぶた二寸程淺疵一所

沼間右京本多伊藏

右の頬之下咽へ懸五寸程深さ七八分程之疵一ヶ所右の手首の下堅より三寸程淺疵一ヶ所

襟下より咽へ懸深さ五寸程の疵一ヶ所  
右手疵内外療治手當仕りし銘々疵之深淺并に手足厥冷或は〇等強く御座候間脈疵之儀も  
右に准之に事に御座し尤も危篤之儀も付變症等の儀は難斗奉存候

四月廿三日

當御番 竹内 莫仙  
竹原 玄庵  
川島 周庵  
天野 良雲  
曾谷 伯安

この書取を差出しぬかくて其夜も明渡り廿三日の當番各自登城なしたりしかば御目附新庄

鹿之助より前夜の始末を上達し當日當番の御目附たる金森甚四郎引渡して創痕の容体をも言次つ加泊阿倍四郎五郎にも退出了たりける之に依て金森甚四郎は更に酒井山城守と、もに痕創的を檢視するは醫師の診斷とは大いに相違し本多伊織、沼間右京、戸田彦之進は即死なし神尾五郎三郎、間部源十郎は全く微傷なりければ直ち其旨を書上たるにぞ西城の役人評議の上若年寄森川内膳正より左の通り仰せ渡さる

酒井山城守

其方組松平外記義は仮埋いたし疵人義は下宿養生爲致可申  
この達書酌の來りしかば山城守より御目附へ其の趣きを通達し御目附よりは即刻に御作事方に下命して坂下御門へ仮門を繕へ御小人目附平野勘一郎同く東浦庄五郎も附即死創痕的を駕し乗せ各自宅へ下たる後外記の死骸は乗物に遷し御小人附添御小納松平頼母へ引



渡したるは其の夜の五時を過る頃なり因て御目附金森甚四郎は山城守と同席にて當日相番の御書院番池田吉十郎(五十二)長野勝次郎(五十三)川村清二郎(五十二)堀長左衛門(五十二)伊丹甚四郎(五十二)横山重三郎(五十六)小尾友之進(五十六)を呼出して其場の始末を尋問し追て評定を開かるべければ其の折口書の相違せぬやう心得べしと嚴達し事落着まで差扣の遠慮するやう達たり斯て御目附新庄鹿之助、阿部四郎五郎の兩人へも遠慮の義を申し通之山城守も表を捧て其の儘歸邸なしたれば大久保六左衛門も謹みて登城を控居たりしとなん却而説安西伊賀介は廿二日の夜を籠て俄か登城し心著皇伴をも具せず駈付しが隨即詰所に到らずして悄悄地陸尺溜へ行き事の様を聴糺そに相番松平外記亂心にて同僚五人は傷を負せ自ら屠腹したりしよしと定かみ締の知了しかと心慌忙て鎮まらず乃ち詰所に仕候したるは肚裏にて想し如く外記は全く宿恨と小禽御成の拍子木番を言附られしは曲淵と俺どが之を拒みたる鼠山の稽古の事を恨んで爰に至りしなり

第十一回

外記が築地の屋敷には松藏の報知より猶追々の噂を聴き奥方八重子妹花乃を始め園の他の者まで涙をのみ氣を勵まし互ひに諫め諫められて立關前より奥向まで清潔なし蕭然として御沙汰を待たるは其夜亥刻をぐる頃西城より外記が屠腹して朱染たる死骸下りければ始は氣強く見ねたりし奥方八重子を始め花乃園は猶さらけ替り果たるれ姿と血に塗るゝも厭ひなく外記が死骸の右に左に取すがり泣より外に事ぞなき爰もまた頼母は各の死體屋敷々々へ下ると聞き用人の他の家人らを連築地の屋敷へ走附來れば八重子が父座

光寺立藩も家臣を引供し駈つけつ此体を見て八重子を叱り花乃を諫め野邊の送りの用意を爲し翌晩竊に代々の菩提所浄土宗深川靈巖寺に仮葬りを做したりけり其後伺ひの上築地の屋敷を引はらひ八重子を始め皆牛込の頼母が邸へ一ツよなりぬ案下再説評定所於て岩瀬伊豫守筒井伊賀守本多彌八郎金森甚四郎など立合よて外記又關係の者を呼出し詰問のうへ種々に評議して猶ろの内情の是非を探りける故白川の關ならねども霞棚引ころにして夏は早晩うち過つ秋風立るときとは成ぬ然ば松平頼母は倅外記が相番を切てより既に四ヶ月を過し早七月に至り亡魂を迎へる孟蘭盆會の軒燈籠いいとぞ淋しき秋と成しを哀み妻二葉嫁八重子娘花乃らよ言ふ倅の爲に仇なせし嫉は悪けれと既夫は討果し恨みは其場て消たるなり然るに今その亡魂を祭る新盆來り倅外記のみを思ふに附倅は伐れし本多沼間を始め彼の黨の父母妻子らが歎きも無がしと想像られて氣の毒も思ふぞかし然るに彼等が方は未だれ谷中にて落着に至らざれば表立て墓參りをさへ爲るとならず又外記の頭酒井山城守を始め與頭大久保六郎右衛門以下その時掛り合の人々はみな逼塞眞の身となり晴天白日を見るその能はざるも氣の毒の第一なれば此人々の落度ゆり本出沼間らが罪も軽く納らせたく存するにより竊に上野の凌雲院僧正を頼み日光御門主のおん聲掛りを願はんと思ふが汝達の所存いかよぞや二葉八重子花乃詞を揃へ妾らが今日の哀しさを思ひ比べて彼の方々の人の歎きも仰の通り想像られて痛はしければ凌雲院の僧正は幸ひ御別懇なるにおん頼みありてれん科かるく早う事の納る様よはん計らひを願ひまつるとも頼母點頭然らば是より夜道なれども忍ぶよは便利なる故上野に到りて成か成らぬか凌雲院に頼み見んとて些少の

供人ひき連つ上野に到り凌雲院に意中を演て頼みければ凌雲院もその志の私なきを感せしか早速宮様へ事の由を申し上やしたりけん御老中水野出羽守へ日光御門主の御使ひとして執當任心院まゐり公用人山田翁助へ相渡したる御口上書左の通り  
西丸御書院番酒井山城守組御番衆先だつて殿中不慮のぎのあり右御番しう一同此たび御吟味中のよし右の御裁断の上如何やうの御答仰付らるべくいやは計らせられ難く候得とも何も 御代々忠勤の家が累世 御高恩の者よて一同一命も相抱り候程の御仕置に相成るるか又は家苗断絶にも及びては當人はやすに及ばず多輩の親族れられ入り奉り且悲歎の程如何ばかりと御察し思召るる不遠 公儀に於て稀成日光 御參詣も 仰出され格別目出度御時節も 在せられ候得ば右の者ども是非の輕重は抱はれず御憐愍の御沙汰 在せられ様成れたく 思召よし尤御政事向の儀彼これ仰立られし深く御遠慮に思しめし得共多輩の者ども悲歎の程御法事中にては深く御不便も思召るる相成べき儀よはし何卒右の者ども 御答の筋格別御寛宥の御裁断御座しやう被成下度思召し此段御取はからひの程幾重にも頼入度御使を以て仰せ入れ候  
日光御門主御使

八月

斯の如くなりければ寛典を以て速に落着致さすべきなれども猶穿議中なるより先外記が新參を恥しむめ蔑視するの惡弊を正んと命を捨たる志を無よ爲とべからずとて御老中月番松平和泉守より布達する書附

住心院

西丸御書院番松平外記相番どもを刃傷に及候始末御詮議を遂られ候處相番ども常々嘲弄がまじき仕なしも有之に付差迫り亂心候様子に相聞の變事の期に至りては相番ども立向ひ候者も無之段不覺語の事候御番勤仕の作法組中申し合の儀等は前々度々仰出されの趣も有之處兎角心懸等閑に相なり右番の者ども權高に我意を立新規の者を迷惑致させ候儀組々風儀の様成行候ては如何の次第に候向後御番方は申と及ばず何れの向ても非常の事これある時勤かた相立ろる様申し合せ一同相互に和熟いたし御奉公筋專一に心懸申とべく候

右之通向々へ可被相達候

十月

十月九日に至り漸取調つき西丸御書院番頭酒井山城守同組與頭大久保六郎右衛門西丸御目付新庄鹿之助同河部四郎五郎取扱ひ不束につき御番御免のうへ差扣御醫師藤原玄忠は御呵のうへ差扣同竹内英仙會谷伯安川島周庵天野良雲は御呵置て濟めり

- 高千石 屋敷牛込築地 御小納戸役御免 外記 父 松平 三十三才
- 高八百石 屋敷牛込五十騎町 高屋敷召上られ改易 本多 伊織 五十七才
- 高八百石 屋敷小日向 高屋敷召上られ改易 沼間 右京 五十四才

清水御用人可十郎惚頓

- 高三百俵 屋敷牛込冷水番所 御切米上り 戸田彦之進 三十四才
- 高千五百石 屋敷三河臺 高屋敷召上られ改易 神尾 五郎三郎 三十才
- 高千石 屋敷三番町 御番召被放隱居謹慎 池田吉十郎 四十二才
- 高千五百石 屋敷五番町 御番召被放隱居謹慎 間部源十郎 六十六才

曲淵大學

其方儀駒場野追鳥がり付席下の松平外記拍子木役に相成候を心宜らず存其日外記吹聴に参り候節申し嘲り同人宅寄合の節岡部半之助申すに任せ不參致し外記心留候様子にて病氣を申立拍子木役を相斷當四月廿二日相番共を刃傷及候次第至候段差迫亂心候儀と相聞候外記儀氣挾なる生質と存候上は其心得も可有之とて嘲弄がまじき儀申成候段不埒の事に候依之御番御免小普請入仰付らる者也

右谷より猶翌年十一月駿河臺の屋敷上られ目黒行人坂へ遣る

高千二百石 屋敷小川町

安西 伊賀之介

其方儀駒場野追鳥狩の節席下の松平外記拍子木役と相成候を心宜からず存同人宅寄合の節遅刻致し席上に於て外記が心障り候儀申し鼠山稽古の節も彼是と嘲り恥じめた

る挨拶に及び同心心に留候様子にて病氣を申し立拍子木役を相斷當四月廿二日相番共ニ刃傷及び候次第至り候段差迫り亂心候儀と相聞候外記儀氣挾成生質と存候は、其心付も可有之候の處、嘲弄がまじき儀申し候段不埒の事、候依之御番召放され小普請入仰付らるゝ者也

右答ふ依り猶翌年十一月小川町の屋敷を上られ麻布廣尾へ遣る  
其外同役御帳番敷庄七郎近藤小膳同平飯塚早之助内藤政次郎長野勝次郎堀長左衛門川村清一郎伊丹甚五郎荒川市郎兵衛日向辨吉横山重三郎井上政之助小尾友之助の人々或は小普請入逼塞或は小普請入どうにて先は落着なしたりけり是、因て御書院番は元より大御番を始め他の御番方諸組々の與力同心に至るまで外記が一身を犠となえて此惡習を一洗し徳川の家風を正さんとせし志、徹り其當分は此弊拭ひて取りしが如く止たるゆゑ世人外記を賞して戰場に臨み君の御馬前にて榮ある働させしより其勳功遙く勝れりと云わへりければ是を聞く頼母二葉八重子花乃また松藏お園に至るまで然も有なんと、既れ嬉しきに附また哀さの彌増て時し分たぬ泪の雨、袖のみ濡して居たりしが八重子は妊娠の月満玉の様な男子を安々産たるに外記が面さしを其儘なりければ頼母夫婦八重子花乃を始め悦び堪ず始めて家内笑顔を合すに至りぬ然れば此稚子を孫太郎と号け、(後内記)何れもの寵愛比るに物なし茲、於て松平の家跡を繼ぐ嫡孫出来ければ外記の遺言、任せ若黨松藏を以て是が守役の用人と定めければ松藏は外記に仕る心地しつ是を懐中し是を膝にし早く御材の伸給へよと、餘食を忘れて、傳仕へたり又花乃の許嫁なる松平諒吉は花乃が顔かた

ちの美なるのみならず此度の事件にて心の質なるまで判前せしかば頼り、婚姻を望むと雖頼母方に未だ血脈の相續人あらざりし故控居たる、外記が遺腹の男なりしを以て再三再四結婚を促しければ頼母は遂に黄道吉日を撰んで松平諒吉方へ花乃を嫁し、兩家万歳を祝けり此時お園は頼母及び八重子らの依頼により花乃に、傳の女中となり松平諒吉方へ至り彼處に在しが諒吉また才ありて花乃との中殊に睦まじかりける故、最はや案じなして強て暇を貰ひ元の松平へ歸り兄松藏の家に住しが兼て若刀稱(外記)の恨み思せし安西曲淵ら夫々罪科は請たるも存命に在するこそ遺憾なれと竊かと思ひ立とありければ若刀稱の菩提の一ツ、又は忠僕要助の後世を吊らはんと云たて念佛三昧にて鎖籠りをり密果に、この機會をぞ求めける

れ、園安西曲淵らのとに附また一團の話しあれども、開は題を替て他日に、殘し此書中、は是を結局とせ  
再説外記は古參らが新參を壓する舊弊を一洗せんどの憤死より其名を聞其働きを聞て是を慕ひ是を快しとせぬ者なかりしかば芳名一時に天下に轟き九州陸奥の果までも人集れば其噂のみなりし然れば松平頼母は元より外記の後室八重子同遺腹子孫太郎用人志賀松藏妹お園松平諒吉與方花乃まで世の譽ものとなり少しく義氣ある輩は大いよ是を慕ひたりとぞ人一代名は末代とは嗚呼うれ是を云か  
昔千代田乃傷 大尾

明治二十二年三月十日印刷  
全二十二年三月十日出版

定價五十錢

發行者 日吉堂 菅谷與吉

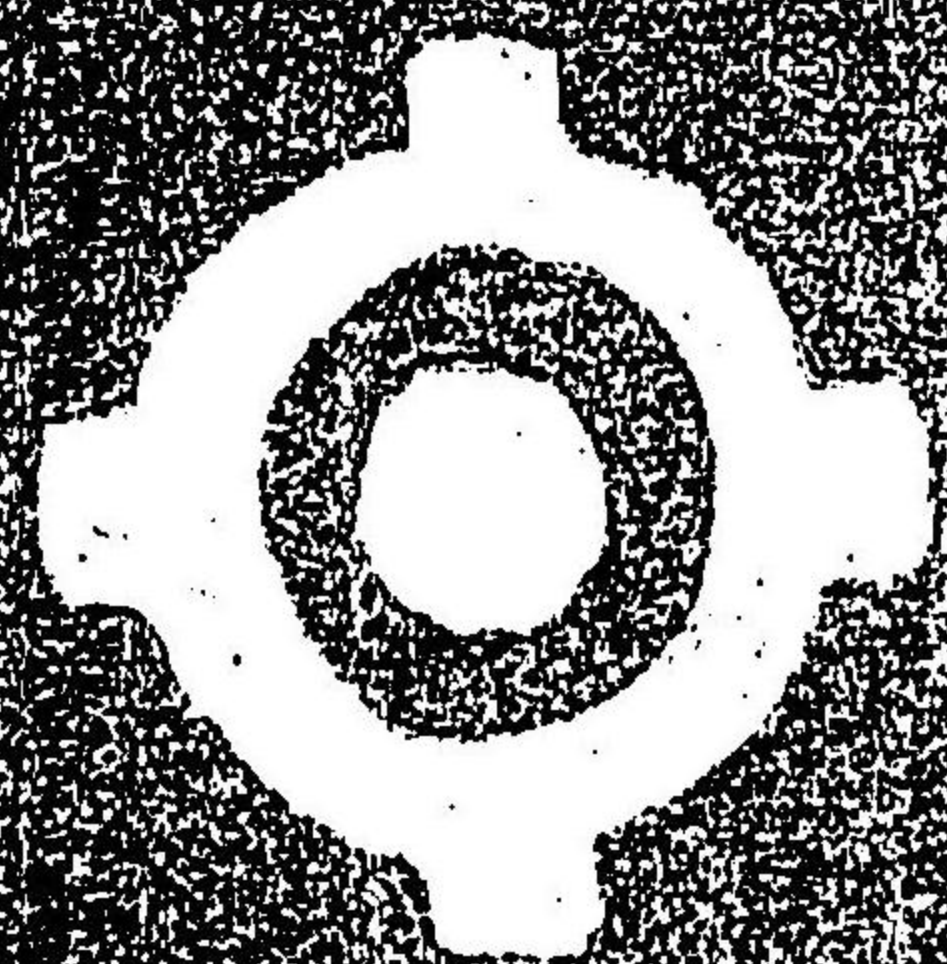
神田區元岩井町三十七番地

印刷者 大場沃美

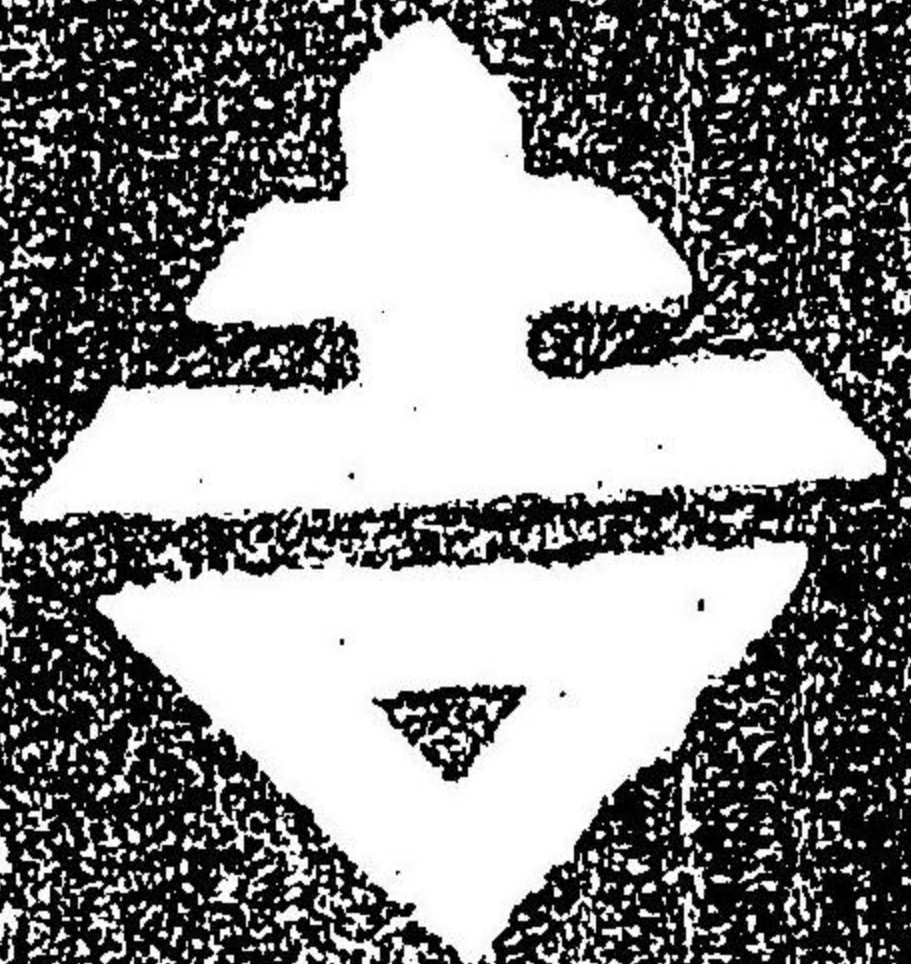
神田區柳原河岸第拾壹號地

# 發賣所

上田屋榮三郎	近江屋園吉
大川屋錠吉	內藤加我
山口藤兵衛	井上勝五郎
木屋宗次郎	明進堂



新



學

蘭